

## 神聖と洗聖

### ピエール・クロソウスキー『バフォメット』におけるオジェをめぐる

後庵野 一樹

#### I はじめに

本稿の目的は、二十世紀フランスの作家ピエール・クロソウスキーが1965年に発表した小説『バフォメット』<sup>1</sup>に登場する作中人物であり、物語で象徴的な役割を果たす少年のオジェ・ド・ボーゼアンに焦点をあて、この少年が作中の登場人物のひとりという役割を超えて、クロソウスキーの思想そのものを象徴する存在である可能性について吟味することにある。『バフォメット』に登場する少年オジェは、作者にとって極めて重要なモチーフであったように思われる。実際、少年オジェは『バフォメット』という小説作品を超えて、多くのタブロー作品で題材として描かれているし、作家の死後、2001年に出版された未発表の戯曲的作品である『不死の少年』<sup>2</sup>にもその中心人物として登場する。そもそも『バフォメット』において、オジェは半ば特権的な位置を与えられた極めて異質な存在として描かれていた。本稿では、クロソウスキー作品に初めてオジェが登場する小説『バフォメット』に焦点を当て、彼がどのように描写されているかについての分析を中心に論を進めたい。そのため、本稿ではまず、『バフォメット』が物語の背景として依拠する史実のひとつであるテンプル騎士団に着目し、この歴史的参照項とフィクションである『バフォメット』を比較することで、史実と小説との間の関係性を明らかとする。そこから、史実を踏襲した部分と、作家が自由奔放にそれらを侵犯しながら『バフォメット』という小説作品と、その登場人物のひとりであるオジェを練り上げていった過程が明らかとなるだろう。ところで、そうして練り上げられたオジェは、『バフォメット』作中で処刑によってあっけなく死を迎え、小説第三章において縊死体となって再登場する。そこで本稿では次に、縊死体としてのオジェの身体性に注目し、その身体が示す両義性を明らかとする。この両義性は、おそらく、少年オジェ固有の要素であるにとどまらず、むしろ『バフォメット』という小説作品そのものへと波及することで、小説そのものの両義性と共鳴してもいるように思われる。そこで本稿では最後に、クロソウスキーが著した小説『バフォメット』が持つ侵犯的あるいは越境的性格について言及し結びとする。

#### II 『バフォメット』とテンプル騎士団

小説『バフォメット』は、クロソウスキーが1965年に上梓した長編小説である。物語は、中世フランスにおけるテンプル騎士団の興亡と騎士団内部で行われていたという邪神バフォメット信仰という歴史スキャンダルを題材としたもので、邪神の化身と化した少年オジェと、

<sup>1</sup> Pierre Klossowski, *Le Baphomet*, Paris, Mercure de France, 1965, réédition, Paris, Gallimard, coll. « L'imaginaire », 1987.

<sup>2</sup> Pierre Klossowski, *L'Adolescent immortel*, Paris, Gallimard, coll. « Le Promeneur », 2001.

彼に取り入ることで邪神による救済と御力に与ろうとする騎士団総長のジャック・ド・モレーをめぐって物語が展開する。 Templar騎士団内部におけるこの邪神崇拝については、後世における創作であるというのがおおむね現在の定説である。クロソウスキーも当然この事実を知っていたはずだ。そこで彼は、邪神崇拝の密儀が騎士たちの死後に、処刑され死して靈魂となった彼らによって人々に知られ得ぬところで秘密裡に行われた、という大胆な解釈を展開する。この解釈によって、クロソウスキーは、Templar騎士団における邪神崇拝のスキヤンダルを単に出鱈目な風評として一蹴するのではなく、そこに作家固有の想像力が介入する余地を見出している。実際、プロローグを除く小説の本編全体を通して、登場人物たちは一人の登場人物以外みな靈魂であり、その姿は流動的で、可変なものとして描かれている。そのため、登場する総長のジャック・ド・モレーや、その他の修道士、あるいは騎士長や巡察使といった登場人物たちが、「僧衣の輪郭を消しながら、ますます濃密に渦を巻い<sup>3</sup>」たり、その渦が「独楽の弧を描いて広がっ<sup>4</sup>」たり、「三つの螺旋に分裂し<sup>5</sup>」たりするのも、この小説においては決してメタファーではなく、即物的描写として理解されねばならない。先に述べた作中唯一、生身の肉体を与えられた人物とは、少年オジェであり、彼だけは「生きているわけではないが完全に死んでもいない<sup>6</sup>」身体を持つ存在として描かれている。この少年オジェについては次節以降で詳しく見ていくとして、まずは『バフォメット』が土台としているTemplar騎士団の興亡について、歴史家レジヌ・ベルヌーの記述を頼りに見ていきたい<sup>7</sup>。

1095年、クレルモン宗教会議でローマ教皇ウルバヌス二世は、当時イスラームのセルジューク朝が支配していた聖地イェルサレムの奪還を宣言した。翌年にはフランス、ドイツ、南イタリアの諸侯たちによって奪還のための遠征軍「十字軍」が組織された。第一回目の十字軍は1096年にイスラーム圏へと進軍し、1099年にイェルサレムを占領、イェルサレム王国を建国した。キリスト教によるイェルサレムの占拠によって西ヨーロッパから聖地への巡礼者が増加したため、道中の安全を確保し、巡礼の人々を守ることを目的として、いくつかの騎士修道会が生まれた。その中でも、フランスの貴族ユーグ・ド・パイヤンが中心となって設立されたのがTemplar騎士団である。この軍団は貴族の騎士、その楯持ち役の修道士、教誨師、司祭の四つの階級から成り立っていた。彼らは第一回十字軍および第二回十字軍に前衛として参加した。そこでめざましい活躍を見せたTemplar騎士団は、教会から莫大な寄進や課税免除など数多くの特権を授かり勢力をますます拡大させた。はじめはいくつもある騎士修道会のうちのひとつとして聖地イェルサレムの防衛や巡礼者の警備に参加していたが、テ

<sup>3</sup> Klossowski, *Le Baphomet*, *op. cit.*, p. 66.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 101.

<sup>5</sup> *Idem.*

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 97.

<sup>7</sup> 以下、Templar騎士団の史実とされている事柄に関する記述については、レジヌ・ベルヌー『Templar騎士団』（橋口倫介訳、白水社、1977）および、橋口倫介『十字軍騎士団』（講談社、1994）を主に参照した。また、澁澤龍彦「秘密結社の手帖」（『澁澤龍彦全集』第六巻所収、河出書房新社、1993、p. 309-523.）、篠田雄次郎『Templar騎士団』（講談社、2014）も適宜参照したが、これらについては著者による脚色が多く含まれるため、史実に関する部分に限ってはあくまで参考程度にとどめた。

ンプル騎士団が他の騎士修道会と一線を画すようになったのは、その財務管理能力の高さに  
所以があった。イスラームが聖地を再び奪還すると、十字軍運動そのものの失速もあいまっ  
て多くの騎士修道会は役割を失い崩壊したが、テンプル騎士団は潤沢な資金と堅固な城塞を  
生かして西ヨーロッパでも有数の財務機関として隆盛を極めた。十三世紀にはパリに本部が  
置かれ、このころ騎士団は、各界の貨幣の保管や法王、国王、封建諸侯などに金を貸す銀行  
といった役割を担うようになっていた。ところで、時のフランス王フィリップ四世は王権の  
拡大強化と中央集権化を成し遂げた点では優れた君主だったとすることもできるが、反面、  
当時のフランスの財政状態は逼迫し、慢性的な財政難にあえいでいた。そんな中で、フィリ  
ップ四世は、悪化の一途を辿る財政上の問題を解決する策を思いつく。その策とは、肥大化  
し膨れ上がったテンプル騎士団保有の財産や所領を接収することであった。そのために国王  
は、騎士団解体を国民に納得させ得るような大義名分を欲していた。そこで暗躍したのが、  
当時フィリップ四世の顧問で尚璽官をしていたギョーム・ド・ノガレである。そのいきさつ  
については、小説『バフォメット』のプロローグにおいて、ド・ノガレが策謀を巡らせテン  
プル騎士団の解体という目的を達成しようとする様子として、次のように書かれている。

ド・パランセ夫人は宮廷の事情に明るく、テンプル騎士団に対してのフィリップ王の  
意向を見抜くことができる貴重な人材の一人だった。先祖の贈与品を取り戻すという非  
常識な望みを抱いて、ド・パランセ夫人はいつあるかわからない教会財産の民間移譲に  
ついて交渉するために、ギョーム・ド・ノガレの意中を探った。このフィリップ王の陰  
気な補佐官は、利益のためならどんな企みも進んで行くこの女には利用価値があるとす  
ぐさま理解した<sup>8</sup>。

ド・パランセ夫人の存在は必ずしも史実ではない。というのも、テンプル騎士団に関する  
研究において、とりわけギョーム・ド・ノガレの暗躍については、明らかに史実とされる事  
柄は決して多くないからである。これはテンプル騎士団そのものの秘密主義的性格や、本来  
は一個の事実を語っていたに違いない文書の「紛失」などが要因とされているが、であるか  
らこそ一層、ここには作家自身の想像力が介入する余地がある。クロソウスキーは、逆る想  
像力を十二分に発揮し、テンプル騎士団の崩壊前後を描いているのである。その物語とは次  
の通りである。『バフォメット』でのド・パランセ夫人は、十五歳でユーク・ド・パランセに  
嫁いだ。子宝に恵まれぬまま、夫が1302年にベルギーのコルトレイクで起こった戦いの最中  
に戦死したため、彼女は莫大な遺産を相続した。だが、再婚するつもりは微塵もなく、彼女  
は残りの生涯を未亡人として過ごした。ド・パランセ夫人の父方の大伯父は、所有していた  
土地の三分の二をテンプル騎士団に寄進しており、その寄付の見返りとして、テンプル騎士  
団の修道士たちが残った領地を警護する任についていた。大伯父亡き後、その領地はド・パ

---

<sup>8</sup> Klossowski, *op. cit.*, p. 8-9.

ランセ夫人に遺贈されたが、彼女は自分が相続した土地を修道士たちが我が物顔で管理することに不満を覚え、かつて大伯父が寄進した土地もろとも取り戻そうと躍起になっていた。ド・ノガレはそんな彼女を利用し、騎士団の解体を目論んでいたし、夫人にしてみてもかつての領地を取り戻せるならばド・ノガレと手を組むことも吝かではなかった。ド・パランセ夫人には甥が一人いた。名をオジェ・ド・ボーゼアンというこの孤児の少年を、彼女はボーゼアンの領地だけを目当てに養育していたが、この少年がド・ノガレの策略にとって有用だと気づくやいなや、家庭教師を唆してオジェに誘惑の術を教え込ませた。夫人はオジェを騎士団に小姓として送り込み、オジェはその生来の麗しさによって、騎士団内部に男色を流行らせることに成功した。かくしてド・ノガレはテンプル騎士団を教義に反する集団として異端審問にかけられる大義名分を得たのである。そして、1307年10月13日にフランス在住のテンプル騎士全員が一斉に逮捕され、異端審問にかけられることとなった。審問にはおよそ五年の年月が費やされたが、予め準備されていた有罪は覆ることなく、1314年3月18日に、騎士団最後の総長ジャック・ド・モレーが火刑に処され、テンプル騎士団は事実上の消滅を迎えた。

テンプル騎士団内で男色が行われていたという容疑については、ド・ノガレによるでっちあげであるとする説が現在では主流である。だが、実際に男色があったという説や、騎士団への入団における儀式として男色的行為が行われていたとする説が完全に消滅したとまでは言えず、テンプル騎士団に秘術性や神秘性を結びつける見方については、人の関心を煽るという点では現在でも有効だろう。この点に関連して、澁澤龍彦が次のように書いている。

しかし、テンプル騎士団には、たしかに秘密の儀礼もあったし、峻厳な戒律や、神秘的な入社式もあったようである。外部の者には窺えない秘密の儀礼が、かえって彼らに異端的な印象をあたえ、その敵に利をあたえた、ということもあり得るだろう<sup>9</sup>。

クロソウスキーがこの秘密の深淵に興味を抱いたとしても不思議ではあるまい。かくしてクロソウスキーは、テンプル騎士団の栄枯盛衰の史実を土台とはしつつも、史料が十分に語っていない部分を自らの想像力を働かせ補うことで、『バフォメット』を歴史的事実に立脚した幻想小説として成立させたのである。留意すべきは、クロソウスキーの狙いが、単にテンプル騎士団における異教的秘密主義の内情を描くことのみにあつたのではなく、むしろそうした枠組みの中で神的な存在と人間との間の一種の交流の瞬間における神聖さと卑猥さの混ざり合いを描こうとしたことにあるという点である。本稿においてとりわけ注目したいのは、この小説がもつ虚構性と猥雑さを一手に引き受ける美少年オジェの存在である。

### III 小姓オジェ

オジェは「十四歳に満たない<sup>10</sup>」少年で、ド・パランセ夫人同様、クロソウスキーによって

<sup>9</sup> 澁澤龍彦、前掲書、p. 366.

<sup>10</sup> Klossowski, *op.cit.*, p. 219. 当時、フランスの大部分の地方慣習法では、男子は十四歳で成人を迎える

創作された架空の人物である。オジェは叔母であるド・パランセ夫人に特別な感情を抱いている。

若いボーゼアン侯は、保護者でもある叔母に対して——彼女は四十を過ぎていたが、ある人々にとっては魅力的に思っていた——最近目覚めた感覚に流されて不純な情熱を抱いていたが、その臆病さのせいであらゆる試練を甘受し、あらゆる試練に献身的になることしか、愛情表現の術を知らなかった<sup>11</sup>。

こうしてオジェは、叔母から与えられるであろう愛情に期待して、盲目的に彼女の策略に乗る。少年が心待ちにする愛情は単純な親子愛や家族愛などではなく、最も激しく暴力的な愛情であるだけに一層、オジェの身体はますます誘惑的なものになっていく。結局、この想いはド・パランセ夫人に知られる由もないまま、オジェはテンプル騎士団に小姓として入団する。入団後ほどなくして、オジェはド・マルヴォワジーという名の修道士とねんごろな関係になる。

ド・マルヴォワジー修道士が、周囲にちらっと目をやったのが見えた。廻廊に二人きりでいるところを誰にも見られていないことを確かめると、ド・ボーゼアン侯のまえに跪き、若い少年の右手をとって、無作法ゆえに見せかけるだけのつもりでうやうやしく接吻した<sup>12</sup>。

キリスト教一般の伝統として、接吻は単なる愛情の表現ではない。むしろ騎士団所属の修道士にとって、接吻の行為が持つ特別な意味は極めて重要であった。実際、修道会への入会式において、極めて儀式的な接吻がなされていたことが知られている。この点について、レジーヌ・ベルヌーは次のように書いている。

このとき、志願者はマントをはおる。聖堂付司祭が一連の祈りと、他の修道会でも通常唱えている入会の詩篇《見よ、何と美しいこと、快いことか！兄弟のようにもに住むことは》（詩篇三二）を読誦すると、総長またはその代理者は、司祭と同じように、

---

とされており、また、テンプル騎士団では徴募は成人に限られるとしていた。こうした史実を踏まえ、『パフォメット』のオジェは、成人的で成熟した騎士団内部でただ一人未成年であり、そのため唯一無二の存在として描かれている。Cf. レジーヌ・ベルヌー、前掲書、p. 32。

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 10. 少年が抱く母親代わりの叔母に対する家族としての愛情を超えた特別な感情というテーマは、1953年の『ロベルトは今夜』にも見られる。そこでは甥のアントワヌは、叔母であるロベルトに対して並ならぬ想いがあることを独白の中で述べる。「たしかに叔母のロベルトは、ぼくに激情を吹きこんだ。しかし叔父はぼくの動揺を見抜いていたから、ぼくのなかに自分の邪さを観察しようとして、不実なやり方でぼくの動揺を利用したのだ。この年代の少年にはありがたいことだが、ぼくは自分が抱いているこの情熱がきわめてプラトニックなものであってほしいと願っていた。」(Pierre Klossowski, *Roberte ce soir*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1954, p. 9.)

<sup>12</sup> Klossowski, *Le Baphomet*, *op. cit.*, p. 17.

兄弟を立たせ唇に接吻する。この接吻は封建制の時代に臣従礼で行われていたものと同じ性質のものである<sup>13</sup>。

要するに、入会式における接吻は、相互の忠誠と平和を示すものであり、団結のために必要な儀式的行為であった。その一方で、澁澤は入会式における接吻に関わるひとつの異説を紹介している。この説は後世における創作であり、実際に行われていたものではないと考えるのが妥当であろうが、史実に立脚した虚構作品『バフォメット』において、クロソウスキ一の念頭にもあった可能性は否定できない。

騎士団の入社式には、魔術的なエロティックな儀式が行われていたという説もある。新参者は、教会堂のくらい参事会室にみちびかれると、まず着物をぬいで裸になり、水で全身を洗い清め、宗団の秘儀を守る誓いを立てさせられる。すなわち、古参者の発する質問に、いちいち答えなければならないのだ。それから、奇怪な偶像バフォメットに礼拝し、宗団の長老から接吻を受ける。その接吻は、口の上に行われるばかりでなく、想像力をつかさどる神経叢の上に、臍の上に、また性器の上にも行われる<sup>14</sup>。

この場合、接吻は相互の忠誠などではなく、所有ないしは隷属のプロセスのように見える。すなわち接吻を受ける行為そのものが崇拜すべきバフォメットとその代理人たる総長への服従を意味することで、ある種のイニシエーションとして作用しているのである。したがって、ド・マルヴォワジー修道士によるオジェの右手への接吻は、一見すればオジェに対する忠誠の誓いか、あるいは親愛の情の表現のように思えるが、本質的にはド・パランセ夫人の庇護下からの篡奪であり、あえていうならカトリック的で平穏な世界とは異なる、異教的で剣呑な世界への招来を意味するのである。実際、この接吻が暗示していた通り、ド・マルヴォワジー修道士によるオジェへの笞刑が明るみに出ると、オジェは修道士を誘惑し、騎士団内部に淫風と背徳を広めた罪で絞首刑に処され、満十四歳を迎えることなく逝く。

#### IV オジェの死体

『バフォメット』第三章においては、死体となったオジェが登場する。騎士団総長の命により絞首されたオジェの縊死体は、総長であるジャック・ド・モレーが処刑されてからしばらくたった後も、騎士団本部にある「瞑想の塔」に吊るされたままにされていた。あるとき、死後霊魂となったド・モレーは「瞑想の塔」に入っていく、そこにかつて処刑された少年の縊死体が、処刑された当時の姿かたちを完全に保ったまま、虚空をゆっくりと回転しているのを発見する。

<sup>13</sup> レジーヌ・ベルヌー、前掲書、p. 41.

<sup>14</sup> 澁澤龍彦、前掲書、p. 367.

高い円天井の下の虚空に、麗しい少年の裸体が宙吊りとなって、ゆっくりとまわっていた。両眼を閉じ、頭をうなだれて、多量のカールした黒髪が華奢な肩に広がっていた。首には紐の端が見えていた。

回転しながら、その様相全体が胸や腹、なめらかな両脇、引き締まった尻の蒼白な皮膚と、その両足の完璧な曲線美を示していた。短くて太い男根と丸くふくれた睾丸がなければ、少女に見間違えられるほどだった。筋張った両の手はいまだに背中で縛られていた<sup>15</sup>。

このように、両性具有的なオジェの縊死体は、完全に身体の物質性によってのみ描写されている。心身二元論に基づけば、死によって靈魂と切り離された身体は、中身を失った空の容器のようなものと見なされる。ここではこれと同様のことが起こっていて、オジェの身体は靈魂から切り離されて表面的で外的な要素しか持っていない。そのため、死によって身体を失うことで物質性を離れた純粋な靈魂として存在する総長や、同じような存在となった修道士たちが跋扈する『バフォメット』という特殊な小説内世界においては、肉体を持たない彼らとの対比によってオジェの身体は極めて異質な存在として屹立し、縊死体をめぐる以上の描写は異邦的な雰囲気醸成することとなる。

修道士たちの一斉逮捕（1307年）から総長ド・モレーの処刑（1314年）まで、少なくとも約7年のあいだ放置されていたはずの縊死体が、腐ることも崩れることもなく、生前の端正な姿を保っている事に驚き、また同時に惹かれもしたド・モレーは、この奇跡の亡骸には神の恩寵が宿っていると考え、その身体に自らがどれほど影響を与えられるか試してみようとする。

だが、これほどの問いや懇願も耳に入らないその少年は、虚空でゆっくり回転を続けていた。[中略] そこで首領は、未来の栄光を見せかけているこの存在の秘密のしかけを自分でさぐろうと、口からその肉体のなかへはいろろうとした。しかしいかに強引にはいろうとしても、少年の口のなかに入るところか、その唇の縁のところではぼんやりと四散してしまうのだった<sup>16</sup>。

ここでオジェの死体は、不可侵で排他的なものとして描かれている。そのため、その身体は、靈魂であるド・モレーとの交流の不可能性を示すばかりでなく、自らの純粋性や無垢性、あるいはあえて言うなら神聖さを示してさえいる。これによってクロソウスキーは、オジェという存在を単純な心身二元論的な価値基準から逸脱したものとして提示する。こうして靈魂を失ってもなお完璧さを保つ冒瀆的な肉体を描くことで、作家はキリスト教的諸規範への侵犯を試している。それでもなおド・モレーは、このオジェの縊死体が死後も完璧な姿を保つ

<sup>15</sup> Klossowski, *Le Baphomet*, op. cit., p. 86.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 100.

ているのは神の恩寵であると考えが捨てきれず、その身体をくまなく観察しようとする。すると肛門のところにダイヤモンドの指輪がちょうど穴をふさぐようにして嵌め込まれているのを発見し、彼は憤慨する。

総長は怒りのあまり、自身の息の強さをその宝石めがけて集中させた。誰がそんなことを想像しただろう。輝く番人が立ち退くと、不吉な入り口が大きく口を開けた<sup>17</sup>。

これは明らかに男性同性愛の痕跡であり、いつときは侵犯不可能で純粹かつ無垢であるがゆえに神聖とさえ思えた身体が、実のところ本来は侵犯可能で穢れた身体であったことを開示する。ド・モレーは、半ば好奇心、半ば嫉妬や怒りの感情からちょうど自分のもとを訪れていたスペインの聖女テレジアの靈魂を、さきほど開いた肛門の入り口からこの少年の身体に吹き込む<sup>18</sup>。この明らかに男性同性愛のメタファー的行為によって、オジェは七度の射精とともに生き返る。

オジェ・ド・ボーゼアンと名のるその少年は、かれ〔首領〕をじっとみつめていた。ビロードのようなその瞳には陰険さは微塵もなく、従順そうに見えるはしたが、聖女テレジアの深い眼差しを真似たかのように、何か不吉な滑稽劇からうけとるような気晴らしをかくしきれないようにも見受けられた<sup>19</sup>。

テレジアの靈魂によってオジェの身体はたしかに復活を果たしたが、この引用部が示すように、その身体の純粹さは常に含みを持った純粹さでしかなく、必ず留保が付けられている。こうして、オジェは相反する二つの側面を持つことになる。聖なるものと俗なるもの、純粹さと狡猾さ、無垢と不純、こうした両面性が互いに無化し合うのではなく、一種のギャップとして作用している。すなわち、オジェという存在そのものが、相容れない両極端な要素が交差する地点となっているのである。要するに、クロソウスキーは『バフォメット』において、オジェの身体、あるいはオジェという存在そのものを、聖穢入り交じる両義的存在として描くことで、カトリック的世界と異教的世界との狭間に位置する象徴的な存在としたのである。

## V おわりに

---

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 105.

<sup>18</sup> 『バフォメット』に登場する聖女テレジアとはアビラのテレジア（1515-1582）として知られる人物であり、スペインにおける修道院改革を成し遂げた人物である。死後、生前の功績から1622年に列聖され、聖女となる。彼女は神秘思想家としても知られ、祈りを中心とした神との対話が信仰の中心であると説いた。総長のド・モレーとの邂逅は、二人が生きた時代を鑑みればおよそ二世紀の時を超えてなされたことになる。 Cf. テレジア『イエズスの聖テレジア自叙伝』、女子跣足カラメル会訳、中央出版社、1960。

<sup>19</sup> Klossowski, *Le Baphomet*, *op. cit.*, p. 123.



本稿は、クロソウスキーの小説作品『バフォメット』の中で、テンプル騎士団に入会し、結社内で唯一肉体を持った存在として描かれる少年オジェに着目し、彼がどのように描かれているかについて分析したものである。

まず本稿第二節において、『バフォメット』の背景にはテンプル騎士団の興亡の史実があること、そしてクロソウスキーがその史実を土台とはしながらも、そこに数多くの脚色を加えることで、『バフォメット』を史実に基づく虚構として成立させていることを確認した。このことから『バフォメット』は、その成立の段階においてすでに、テンプル騎士団という史実性と、霊魂たちによる密儀という虚構性のはざまに位置しているといえる。重要なのは、この史実と虚構との交雑がカトリック的なものと異教的なものとの交雑に対応しているという点にある。要するに、この小説は一方ではテンプル騎士団というキリスト教史に名を残す一大修道会と手を組みながら、もう一方の手ではアンチキリスト的で荒唐無稽な異教的世界とも通じているのである。

次に、本稿第三節および第四節において、まさにその虚構性と異教性を一手に引き受ける少年オジェに注目し、ド・マルヴォワジー修道士からオジェへの接吻の行為に関する解釈を通して、オジェという存在の導入そのものが、カトリック的世界から異教的世界への移行を意味することを確認した。また、絞首刑に処され死んだオジェの縊死体の描かれ方について見てみると、その身体は一見すると排他的ゆえに純粋で無垢のように思えたが、実際には穢れのある冒瀆的な身体として自らを開示していた。したがって、『バフォメット』のオジェは、神聖さと流聖さの交差点を象徴する存在であり、これは『バフォメット』という小説作品そのものが持つ、カトリック的なものと異教的なものとの交雑という特徴と一致するのである。

すでに述べた通り、『バフォメット』はキリスト教史におけるテンプル騎士団の興亡を土台とした小説であるが、その本質には、オジェから叔母への近親相姦的愛情、男児への笞刑と男色的行為、冒瀆的な蘇りといった流聖的な要素が散見される。おそらくテンプル騎士団に対するオカルト趣味的な偏見によっても裏打ちされているこれらの要素が、『バフォメット』という小説作品全体を、カトリック的空間と異教的空間とに引き裂いているのである。そしてまさにその分断を象徴するのが少年オジェという存在であり、クロソウスキーはこの少年を描くことで、二つの断絶した世界の交差点を表現したのである<sup>20</sup>。

(ごあんの かずき / 文芸言語専攻5年)

---

<sup>20</sup> クロソウスキーにおける二つの異なる世界の交接を始めに見抜いた慧眼の主こそミシェル・フーコーだったわけだが (cf. Michel Foucault, « La prose d'Actéon », dans *Dits et écrits I, 1954-1988*, Paris, Gallimard, 2001, p. 356.)、おそらくここにクロソウスキーがかつてその秘書を勤めていたアンドレ・ジッドからの影響を見ることができよう。クロソウスキーは次のように述べている。「ジッドは承知のうえか、あるいは無意識的に、キリスト教的な悪魔と古代ギリシアにおけるダイモン (これにはゲーテ的なデモーニッシュの要素も含まれている) とを混同している。この混同によって彼は、純粋な悪魔的なものへの信徒のなかに審美的な働きを確立するだろう。」(Pierre Klossowski, *Un si funeste désir*, Paris, Gallimard, 1963, p. 49-50.) この点については別の機会にあらためて詳細に検討したい。